

セマウル運動と農村振興運動

崔 吉 城

-
- | | |
|--------------|--------------------|
| 1 問題提起 | 5 セマウル運動の起源 |
| 2 朴大統領と経済政策 | 6 セマウル運動と農村振興運動の比較 |
| 3 農村振興運動と朴正熙 | 7 結論 |
| 4 農村振興運動 | |
-

論文要旨

戦後韓国社会の高度成長は朴正熙大統領の経済開発計画とセマウル運動によるものといわれている。特に農村の精神革命とも言われているセマウル運動は朴大統領自ら信念をもって一貫的に推進して成功させたという。それは彼自身農村出身であり農村近代化を推進したことであり、農民層に政治的基盤を置き、国民総和をもって長期政権のために維新憲法を發布してしまったのでセマウル運動の評価は必ずしも肯定的なものだけではない。しかし、とにかく朴大統領の政策や戦後韓国経済の高度成長を理解するためにセマウル運動の研究は必要と思う。その運動の契機や起源はまだ不明である。北朝鮮の千里馬運動とかトルコのケマルパシャ革命などと言われているが寡聞かも知れないが分析的な研究はまだない。私は朴大統領時代を経験したものの一人としてセマウル運動は戦前の日本における農村開発運動と似ていると思った。最近セマウル運動が日本植民地時代の農村振興運動と似ているという言及があったので、私はその実証的な研究をしようと考え、資料を収集した。その過程において、朴大統領が三年間小学校の教師をした学校が農村振興運動の指定学校であったことがわかった。その学校を現地調査をしたところ、老人たちによって朴氏が農村振興運動指定学校で指導していたことを確認した。一方では朝鮮総督府の宇垣一成総督の時囑託として農村振興運動を指導した山崎延吉を知るために安城市の『山崎文庫』を尋ねて調査をした。私は本稿で植民地に因んでいる反日的な枠を無視して脱価値論的に文献研究と現地調査を合わせて日本植民地時代の農村振興運動は朴大統領のセマウル運動のモデルになっているということを明らかにしたい。

1 問題提起

韓国にとって日本植民地時代は不幸な時代であるがその時代のものが残存するのは当然であり、戦後日本的なものを一掃するという政策にも関わらずその時代のものは残り、歴史は持続しているのは事実である⁽¹⁾。韓国の政治、経済、社会、文化のあらゆる面において日本文化の影響が根強く存在することは事実であり、韓国社会の下部構造は日帝時代に枠組みが形成され、政府行政組織、教育制度、マスメディアの形態、徴兵制と軍隊組織、警察組織、企業構造等などのあらゆる制度と組織が日本式の枠によって作られていて、それらは大部分修正されず今日まで温存しているのである⁽²⁾。

ここで朴正熙大統領時代に私が体験したセマウル運動が日本植民地時代の政策を参考にしたという考えを持ちそれを仮説として、韓国の近代化と経済発展が最も著しかった1970年代のセマウル運動を日帝植民地時代の農村振興運動と関連させながら考察してみたい。なぜならば朴大統領は民族主義者でありながら戦前の日本帝国主義的な要素を強く保っており、維新憲法、国民教育憲章、家庭儀礼準則など多くの戦前の植民地的な政策を取ったからである。特に私が植民地時代の農村振興運動と結びつけようとするのは朴正熙氏が農村振興運動の指導をしていた学校の教員として経歴のあることを知ってからである。

朴正熙氏の日本名は岡本実、通名は高木正雄であった。日本植民地時代の彼の主要な履歴は1937年大邱師範学校を卒業して聞慶公立普通学校の教師をして、1940年満州新京（長春）の軍官学校2期生として入校し、1942年卒業の時は満州の皇帝から金時計を受賞し、さらに1944年に東京座間の陸軍士官学校の第57期生徒として卒業の時陸軍大臣賞を受賞した。陸軍少尉に任官され松山第14連隊に配属されて、後に満州国軍第八旅団（団長：干沢甫）の小隊長として従軍した。師範学校在学中はラップ手であり、剣道に優れたという。彼は貧困農民の子として師範学校に入り卒業して3年間義務を終え、教育的体験者であり清廉潔白な人であった。彼の貧困を克服しようとするのはこのような幼少時代の体験から韓国の近代化を図り経済一辺倒とし、それがセマウル運動であるという説明がある。彼は国政のモデルを日本におき、経済政策のモデルは1950年代の池田内閣の所得倍増政策であって輸出政策は成功した⁽³⁾。

軍人と教育者としての経歴は彼の人生観、革命思想などに影響したのであろう。彼は常に親日的であり、時々日本の武士の映画鑑賞や剣道を楽しんだりしており、日本を非難したことは一度もなかった。革命後、親善使節団を最初に送った国は日本であった。軍人的発想で革命をしたとすれば政治的政策なども日本の軍国主義精神、特に国家改革論という革新派将校たちが抱えていた‘昭和維新’（2・26事件）思想の影響を受けたとも言われている⁽⁴⁾。朴大統領は革命公約（「韓国軍事革命委員会布告文」、1961、5、16）で我々祖国は団結、忍耐、勇気、先進を標語にし、民族主体性確立、合理的近代化、産業革命、外来文化受容、国民意識改造を宣言した⁽⁵⁾。そこ

には反日が含まれていないのが注目される。戦後建国の二本柱の国是の反共産主義と反日思想から反日が抜けたのである。彼は李承晩と異なって反日的ではなかったようである。むしろ民族発展のためのフランスの民権革命、中国の孫文革命、日本の明治維新、トルコのケマルパシャ革命、イギリスの産業革命など我々に与えてくれるものは大きいといい、日本の明治維新が入っている。彼はもっとも親日的であった。“明治維新の時の志士のような覚悟で祖国再建に努めており、そのために明治維新を研究している”とか“私は日本陸軍士官学校出身であり、強い軍隊を造るには日本式教育が一番良い”と述べており⁽⁶⁾、それが5・16革命に参考になったことは否定できないのである⁽⁷⁾。彼自身も日本の植民地については遺憾なことがないわけではないが世界的潮流によって旧怨を超えて善い隣人として外交的に行かない、反対世論にもかかわらず1965年韓日国交正常化と1972年の「維新」は当然な政策であったと思われる。‘維新’という用語とすぐ日本の明治維新を浮かべる。その言葉が民族宗教の東学において維新という言葉があり、日本語ではないという学者もいる。彼らによると「維新」という言葉は日本人が使い捨てた言葉だと思えるのは誤解であるといい、東洋の古典の『詩経』『書経』『大学』『周易』などの出典を提示する⁽⁸⁾。しかし朴政権の政策の一貫性から考えると明治維新の「維新」であるのは間違いない。

2 朴大統領と経済政策

朴正熙（1917，11，14－1979，10，26）は1961年5月16日クーデターによって軍事政権を握った時早期に民政に移譲すると公約をしたが、それは守らず長期執権を維持し、‘祖国近代化’という標語の下で経済発展に力を尽くした。経済の高度成長は朴大統領の長期執権の名目であり実体であった。そして人権など多くの問題を含みながらも、朴正熙大統領によって高度成長は成し遂げられた。つまり一次経済開発計画（1962－66）と二次経済開発計画（1967－71）などにおいて経済成長に自信を得た朴大統領は自然に工業化に偏り、農業の近代化が進まず不均衡状態になったそれを突破するためには農民の自覚が必要であると思ひ、三次経済開発計画としてセマウル運動を起こした⁽⁹⁾。セマウル運動とは朴大統領の主導による組織的な農村開発運動として経済的収入増大なども強調したが、主に精神革命であった⁽¹⁰⁾。これが朴大統領の経済政策を象徴的に表わしていると言っているがそれは妥当ではない。なぜならセマウルは国内的には高度経済成長の過程で成長の不均衡、対外的には北朝鮮の千里馬運動に対応するなど国民総和の背景から生じたものであるという⁽¹¹⁾。その成果については、副作用も少なくなかったが韓国農村の潜在的エネルギーを顕在化させる契機となり、事実めざましい発展をとげた村落も少なくないと評価される⁽¹²⁾。しかし戦後の韓国の発展は朴政権以前の朝鮮戦争、啓蒙運動、伝統文化の変化などとも幅広く連動するものであり、特に李承晩政権の土地改革が近代化の基礎であったことを考慮しなければならない⁽¹³⁾。

ここでセマウル運動は朴正熙大統領の主導により行なわれたことに注目したい。そのアイデア

は偶然にそうなったとか独創的だといわれ、あるいは北朝鮮の千里馬運動に対応するものであるとか⁽³⁾ また農村振興運動を想起させるとか⁽¹⁴⁾ いろいろ言われているが、朴大統領が実際どういう契機でセマウル運動を始めたかはまだ不明であるという。John E. Turner/Vicki L. Hesli/Dong Suh Bark/Hoon Yu は日本帝国主義時代の農村振興運動の指導者教育と村会など組織構成はセマウル運動と似ているという⁽¹⁵⁾。朴正熙が農村振興運動からセマウル運動のアイデアを得たかも知れないので Turner などの指摘のように似ているのは一度検討すべきであろう。ここでは朴大統領のセマウル運動に的を当て農村振興運動との関連性について考察してみたい。

3 農村振興運動と朴正熙

農村振興運動は宇垣一成朝鮮総督が始め1930年代に展開された農村開発運動である。農村振興運動が侵略政策のため農民搾取の悪政であるとか⁽¹⁶⁾ 内鮮一体・心田開発・皇民化、朝鮮を永久に植民地化しようとした政策であるなどと否定的な見解がある。宮田節子は農村振興運動の政策の背景について“日本の大陸侵略の拠点として朝鮮を再編成しなければならないという差し迫った要請と、あわせて朝鮮の経済恐慌と民族解放闘争の激化という、植民地支配最大の危機に直面した支配者たちが、自己の努力をファッション化させることによって、その危機を一挙に乗り切ろうとしたことにあり、その具体化の一つが農村振興運動であった”という⁽¹⁷⁾。“貧乏した農民に対する同情”をもった宇垣の政策という肯定的な見解もないわけではない⁽¹⁸⁾。詳細に分析した富田晶子は“更生三目標を達成しうる条件をそなえていた自作・自小作農に対し、頑張ればなんとかなるという幻想をあたえ、自力更生への意欲を引き出すことでは一定の有効性をもっていたのではないだろうか”と肯定的に評価した⁽¹⁹⁾。しかし私はその評価や批判を問題にしない。ただ単にセマウル運動と農村振興運動の関連性に絞って考えたい。

朴正熙大統領は1917年慶尚北道善山郡亀尾邑上毛里117番地にて生まれ、農村振興運動が始まった1932年に亀尾普通学校を卒業した。その年大邱師範学校入学、1937年同校を卒業し、聞慶公立普通学校（1935年4月1日設立）教師として1937年から3年間勤めた。その聞慶公立普通学校は慶尚北道農道訓練所の中の「聞慶更生農園」（聞慶郡聞慶面下里）と「身北更生農園」（同郡身北面葛坪里）の経営主体の指定学校であった。1934年現在慶尚北道には指定学校が31校あり、将来180校まで拡張するといった。当時聞慶郡には南北に分けて中北部は「聞慶更生農園」が聞慶面、麻城面、加恩面、籠岩面、東魯面を担当し、南部においては「戸西南更生農園」（戸西南面店村里）が戸西南面（1956年店村邑に編入）、虎溪面、永順面、山陽面、山北面を担当した。その外身北面葛坪里にある聞慶公立普通学校附設身北簡易学校（2年制）を経営主体にしていた「身北更生農園」は園長は聞慶公立普通学校長有馬近芳が兼任し、身北簡易学校の卒業生だけを指導した。

ここで経営主体は必ずしも学校だけとは限らなかったことがわかる。例えば京畿道驪州では儒教施設である郷校でも行なわれた⁽²⁰⁾。最初は京畿道で普通学校を指定学校にして成果を上げる

のを視察した宇垣総督が全国化したという⁽²¹⁾。それは普通学校の‘一面一校’教育政策として普及に乗って普通学校を、それがないところは簡易学校が農村振興運動の指定学校になったのである⁽²²⁾。聞慶郡では四里毎に勤農組合などが出来たので麻城面梧泉里、虎溪面加道里、戸西南面倉里、永順面浦内里が模範部落に指定された⁽²³⁾。このような前の総督府の調査結果が顧慮されたのかはさだかではないがその中心地の聞慶公立普通学校に訓練所の「聞慶更生農園」が設立されたのである⁽²⁴⁾。朴大統領は農村振興運動の最中にその学校に赴任したのである。彼が農村振興運動の指導したかについては『農山漁村に於ける中堅人物養成施設の概要』（昭和11年12月）により職員は聞慶公立普通学校長の有馬近芳を園長にして園監1名、指導員1名、講師若干名になっており、“農園指導は農園経営の主体たる学校の職員総動員にて之に当たること”という記録から考えると彼が指導したことが推測されるので、私は1996年3月20日から28日の間に現地調査を行ない、慶尚北道聞慶郡葛平里居住の3人の証言を聞き取った。

朴正熙大統領は聞慶公立普通学校の教師であったが10キロほど山奥にあるその学校の附設身北簡易学校で教えたことがあったという。金成煥氏（82才）はこの学校に一人しかいない姜光乙先生が40日間出張の時、朴正熙大統領が来て代講したので直接朴先生から習ったという。その学校は更生園も持っており一人の先生が兼任するようになったので当然朴氏はその代講の期間更生園で教えたという。李教弼氏（75才）も姜光乙先生の代講した朴正熙先生から習ったという。簡易学校3期生であった李台洛氏（74才）も朴先生から直接学んだといい、当時「振興」という言葉を頻繁に聞いたし、更生園の歌を記憶して歌ってくれた。「一つの種から芽が出て、多く実る神秘的な農業、天と地が調和して…」という歌詞を本で習ったと証言してくれた。もしこれらの証言や記憶が正しいとすれば更生園で教えた体験を持ったのである⁽²⁵⁾。指定学校の先生が農村振興運動を指導したということを一尋生男は証言でも傍証できるのである⁽²⁶⁾。

富田晶子は普通学校と振興運動の関わりについて次のように書いている。

学校の部落指導については、従来、営農指導は面や農会の産業技術員など農業指導の専門家を中心に行なわれていたが、農村振興運動の開始とともに、普通学校が単に地方教化の中心たるにとどまらず、営農指導をも担うようになる。公立普通学校では、すでに1920年代後半から、青年の思想善導、農村改良をめざして卒業生を農村の中堅人物たるべく指導し、彼らを媒介として独自に部落の営農改善に乗りだしていた。そこで総督府は運動の開始にともない、部落指導における中堅人物の役割に注目を注ぐようになり、中堅人物を運動の担い手として養成することを運動方針の一環に組み入れるに至った。したがって、学校は教員自らが部落指導にあたり同時に、むしろそれ以上に運動を担う中堅人物の養成機能的役割をはたすことにより、運動に深く関わっていった⁽²⁷⁾。

以上の状況からも朴正熙大統領が「聞慶更生農園」と「身北更生農園」において農村振興運動

と関わって青年たちを指導したということは十分推測される。その更生農園の概略を『農山漁村に於ける中堅人物養成施設の概要』(221-229) から引用紹介する。

1. 目的：農村青年の心身を鍛練し皇国農民たるの信念実力とを啓培し以て農家経営の改善に
 精進し農村の振興に貢献すべき中堅人物を養成するを目的とす。

2. 経営主体：聞慶公立普通学校

3. 設立年月日：昭和10年4月1日

4. 施設の内容

(1) 職員 園長 公立普通学校長 有馬近芳 園監1名, 指導員1名, 講師若干名

(2) 収容定員並現員 収容定員 10名 現員 10名

氏名	年令	学歴	自, 小作別
李相善	20	昭和7年3月 聞慶公普校卒業	小作
崔道明	19	同	自作兼小作
金基宅	19	昭和6年3月 麻城公普校卒業	自作
韓有福	18	昭和7年3月 聞慶公普校卒業	小作
崔聖泰	16	昭和10年3月 聞慶公普校卒業	自作
鄭玉振	17	昭和11年3月 聞慶公普校卒業	自作兼小作
安載出	16	同	同
李相大	18	昭和9年3月 東魯公普校卒業	同
権寧玉	17	昭和10年3月 籠岩公普校卒業	小作
李興燮	18	昭和11年3月 籠岩公普校卒業	自作兼小作

(3) 訓練期間：4月より12月まで9ヵ月間

(4) 土地建物其他設備の状況

1. 土地

田 自作 5反9畝歩

小作 3反3畝歩

畑 自作 1町7反3畝歩

2. 建物

農園生宿舍 2棟 24坪

園監宿舍 1棟 8坪

作業室及収納室 1棟 10坪

牛舎 1棟 1.5坪

豚・鶏舎 1棟 2坪

3. 其他設備

風呂場 1棟 1.5坪

井戸	1 箇所	
堆肥場	2 箇所	8 坪
肥料溜	2 箇所	
灌水用井戸	1 箇所	

〔農具〕 開墾鋤・ショベル・ホミ・朝鮮鋤・レーキ・鋤簾三徳鋤・鎌・肥料桶・手車・チゲ等、
購入費60圓

5. 訓練方法

(1) 訓練方針

1. 勤労体験により農民精神の陶冶に努めしむること、
2. 自治自営の精神を涵養し農民道の闡明確守に努めしむること、
3. 皇国農民の使命を自覚せしめ常に天地の大恩を感謝せしむること。

(2) 訓練項目並日課

訓練項目は1) 家族精神の高揚, 2) 自給自足の生活体験, 3) 我が家の更生計画樹立並実施具体化, 4) 部落共存共栄の精神涵養,

日課は日の出1時間前に起床して東方遙拝, 国民体操, 訓話, 作業予告, 起床から1時間半ころになって朝食を30分と作業準備30分にして午前の作業が始まりサイレンの合図にて終わる。正午30分間昼食時間, 食後1時間は作業準備, そして午後の作業が始まり日没の1時間前に終わる。日没を標準として夕食をする。夜の行事としては入浴, 作業反省, 懇談協議, 読書, 学科及講話, 娯楽, 記帳などを行い, 夕食後2時間から3時間後に就寝する。

(3) 訓練実施状況

1. 合宿制によること：農園生は5人一家族となし全部農園内の宿舎に収容し家族式経営による自治的生活をなさしめつつあり（園内の宿舎及附属建物並作業場の設置に付いては地方における中流模範農家の理想を具現化せしことは本園の特徴となりとす）
2. 自給自足の生活（農園に要する一切の設備及食糧は総て自給自足の主義に則り経営に当らしめつつあり）
3. 指導職員の配置（農園指導は農園経営の主体たる学校の職員総動員にて之に当たること勿論なるも特に指導の徹底を期する為前記職員組織の項に於いて述べし通園長, 園監並指導員其の他講師を配置し之が指導に当らしめつつあり）
4. 実施地の分担（実施地は農園生一人付約3反歩を分担せしめ多角形営農法を主眼とし之を経営せしむると共に尚小作農経営を加味して別に小作をなさしめつつあり）
5. 学科指導は原則としては夜間に行い晴耕雨読式をも併用す）
6. 記帳指導（各種指導は総て現行農家更生方針により之を実施しつつあり）
7. 予定案作製（各戸共次の如き予定案を作製し作業及学科の実習をなす：日中行事予定案は前月末に協議決定し月の初めに掲示す, 週行事予定案は学科及作業に付1週間の予定を立

て日曜日において之を示す、指導日案は毎日の行事につき前夜揭示す)

8. 指導日課に以上各種の事項は日々の行事表により之を励行しつつあり

(4) 修了者指導状況

1. 修了生数：長期7人，短期20人，
2. 本園終了者は個人指導生として学校・郡・面協力の上引き続き家庭につき指導をなす
3. 農園修了者にして成績優秀にして総ての条件に適する者に対しては別途自作農を創定し指導を加う
6. 経費

農園施設費約5千圓は総て地方有志の寄付により之を実施し次年度以降よりは自給自足の方法によるものとす。

7. 其他参考事項

(1) 農園と共励組合に付左の通り実施体験をなす

1. 家計簿の記入は5日1回(市日の翌日)受け持農家に赴きて家計簿の記入を手伝うこと
2. 更生計画の内容説明は受持農家につき計画の内容を説示し計画遂行の信念を涵養せしむること
3. 部落の共同作業の際出勤して協力援助すること

(2) 本施設は本道卒業生指導方針による卒業生指導の一特殊施設にして同園修了後の引き続き本道普通学校卒業生指導方針に則り出身学校の指導生として更に全家指導部落指導へ進展せしむるものとす

8. 規 定

更生農園規定

第1条 更生農園(以下単に農園と称す)は農村青年の心身を鍛練して皇国農民たるの信念と実力とを啓培して以て農家経営の改善に精進し農村の振興に貢献すべき中堅人物を養成するを目的とす

第2条 農園は開慶、戸西南両公立普通学校並身北簡易学校に付設し当該学校を事業主体とす

第3条 農園に左の職員を置く。園長は当該普通学校長とし農園全般の指導監督に当たるものとす、普通学校に有りては教員中1名を簡易学校に有りては担任訓導を以て之に充つ、園監は園内宿舎に住み込み本校授業の余暇を利用し専ら農園の指導監督にあたるものとす、指導員は専ら農園の実習指導にあたるものとす、講師は郡関係職員中より郡守之を囑託す、

第4条 農園に入園せしむべき者は左の各號に該当するものとす

1. 年令満若17年以上満25年以下にして2年以上実地に就き農業に従事したる者
2. 普通学校を卒業したるものにして身体強健品行方正なる者
3. 意志強固にして修了後農村中堅人物として活動すべき者

4. 郡内に居住する者

第5条 農園生の定員は十人とし各面の割り当たり数は左の如く

1. 聞慶更生農園に有りては聞慶6名、麻城、加恩、籠岩、東魯各1名とす
2. 戸西南更生農園に有りては戸西南6名、虎溪、永順、山陽、山北各1名とす
3. 身北更生農園に有りては身北簡易学校卒業生に限る但し各項其特別の事情により増減することあるべし

第6条 入園志願者は毎年2月末日迄に入園願書を出身学校長又は所在学校長並当該面長を経由し園長に提出すべし

第7条 入園生は郡守の承認を経て園長之を決定す

第8条 農園に於いては所定の期間訓練を了したる者に修了証書を授与す

第9条 訓練期間は9ヵ月とし毎年4月1日に始まり12月末日に終わる但し入園は3月20日迄になすものとし入園月日を決定したるときは予め郡守に報告するものとす

第10条 農園生は総て農園宿舎に収容す

第11条 左の各號の1に該当する者には園長退所を命す
怠惰にして盛業の見込みなしと認めたる者

第12条 指導訓練は別途定むる更生農園経営要領により行なう

第13条 農園生の生活は総て自給自足によるものとす

第14条 農園の会計は別途定むるところにより之を經理す

第15条 園長は毎年3月迄に1ヵ年の指導計画を樹て郡守に報告するものとす

第16条 本園は毎年適當の時季に於いて短期訓練生を入園せしむることを得、短期訓練生として入園することを得る者は郡内農村の子弟にして普通学校卒業生又は之と同等以上の学歴を有し現に農業に従事する者とす

第17条 短期訓練生の訓練期間は3ヵ月以内とし其の定員は約10人とす

第18条 本規定は発布の日より之を施行す

そして共励組合と関係を持つこと、家計簿書き、受け持ち農家において計画遂行の信念を涵養すること、部落の共同作業の時出勤して協力援助することになっている。

4 農村振興運動

農村振興運動が日本植民地の悪意ある政策であると言われても韓国史上初の組織的な農村改革の運動であったことは事実である。朝鮮総督宇垣一成氏は国防の人的要素を為す根柢は農村にあると考え、農村問題の解決を目的として山崎延吉氏と会談し、“ナチス政府の農村対策を読み過去苦心を追懐し將又現に朝鮮に於いて試みある農村対策に照らして感慨無量なるものがある。真理は万古世界に共通するところありとの信念を強むるを得て他面においては会心の笑を漏らさ

ざるを得なり”⁽²⁸⁾ (昭和9年1月26日)とし、翌年“幸いにも朝鮮は今や極めて平静であって、治安の確保、教育の普及、産業の勃興に加へ昭和7年以来努力し来たりし精神作興、自力更生の運動は官民の総意、予の所懐に帰一し、同運動開始以来、誠心熱意に依る官民一致の協戮支持は翁然として万象を更生陳下に抱擁し勇躍奮起して進境の著しきものがある”⁽²⁹⁾と評価した。宇垣総督は昭和6年12月愛知県碧海郡に山崎延吉氏の農林学校を視察し朝鮮総督府の囑託にして彼の農村振興政策を積極的に実行させたのである。延吉氏の立案にもとづき、総督府の各局長、課長を中心に農村振興委員を作り、まず、指導者を教育訓練するために、指導精神の基調および指導原則を定めた。全国の金融理事会や道庁主任官など講習会を始め、勤労精神や結髪と服装など革新させたのである。総督府の岡田政務総監とは別懇の関係であったともいわれる⁽³⁰⁾。2千万朝鮮人の開発は7千万の内地とあわせ9千万同胞の発展であると掲げ、さらに朝鮮は開発される十分な能力を持っていることに自信を持って1932年9月「農村振興会」を設置して以来「勤労精神の鼓吹、生活改善、消費節約、国旗掲揚、断髪励行、色服着用、営農方法の改善、婦人野外労働、悪風陋習より脱せ、春窮期（前年の食糧がなくなり麦の収穫までの一番食糧が不足な時期の3-4月頃を言う）をなくすために自主自立、自力更生、協同共栄の農村振興の政策を取り教育や社会運動を行なった⁽³¹⁾。

農村振興策は1)自力更生(心的方面、物的方面)、2)振興対策(対策樹立、対策実行)であり、実行するために朝鮮総督府農村振興委員会、道・郡島・邑面農村振興委員会を置き、“農村振興の要諦は、農村の構成分子たる個々の農家をして、自立自営、勤儉力行、各々業を楽しみ生に安じ、隣保相率いて、郷閭共栄の質を挙げしむるにある斯くするには、農民をして克く農業の本質を理解せしめ、これが合理的経営の方法を体得し、農道の本義を領得して、農家経済の特質を確認し、以て修身より齐家に及び、進んで公共に奉仕するの道義の精神の振作に俟たなければならぬ”⁽³²⁾。基本的には農家が単位になっており運動は部落が単位になっている。

昭和7年9月農村振興委員会を設け、宇垣一成朝鮮総督は道知事会議においては山崎延吉氏の講演を聞かせたり⁽³³⁾、これを指示し、内務部長・産業部長会議を開き、各種の機関の連絡協調と公私施設の統制を計り、11月10日声明を発表をした。内地において長い間農村指導に権威のある山崎延吉氏を招待して44回もの講演会を開き、後内鮮32名による巡回講演会を実行した。山崎延吉(1873-1954)氏は明治6年6月26日石川県金沢市に生まれ、30年東京帝国大学農芸化学科を卒業して、34年愛知県立農村学校長に就任し20年ほど勤めてからは政府地方改良運動の講師として全国を巡回講演をした農政家であり農民教育家であった。昭和5年5月天皇に農業に関する進講をし愛知産業会社(大正9年設立)の開拓農業のために江原道淮陽面蘭谷里においてドイツ人雇用による経営をし、6年宇垣総督の顧問になって年間60日間朝鮮半島を視察し農村の事情(年収内地1100円:60円)を知り、7年から13年間朝鮮総督府の囑託として朝鮮農村振興運動に努力した人である。日本に帰るときには宇垣総督が部下に釜山まで花と果物籠を持って送らせたという。安城市「山崎文庫」には「我農生回顧録」(昭和10)「地方改良談」『農村の新教育:全村学校』

(稲垣稔と共著、泰文館書店、昭和4)『農村教育論』(日本図書センター復刻版、1991)全集や日記などが保管されている⁽³⁴⁾。それによって具体的な政策がわかる。“昭和8年3月、これが具体的方策たる、農家経済構成計画に関する通牒を發し、全鮮の邑面に互り各々1部落を選定し、その第1次計画としては、全鮮に互り2,002部落、55,458戸を選定し、部落内各農家毎に、更生年次計画を樹立し、実行に導くこととした。かくして、また年次度は約3千部落、約7万戸に拡充し、之を全鮮に及ばさんとする計画である”⁽³⁵⁾。

昭和15年1月の『朝鮮における農村振興運動の実施概況とその実績』によると運動の初め頃は水害、旱魃などで効果がなかったが昭和12、13年以後豊作で平穩に進んだという。“本運動開始以来内鮮人間の融和協調、官民相互の親和提携等統治上最も喜ぶべき気運を一層醸成すると共に一般民衆の勤勞精神の振作、生活の改善、消費節約、国旗掲揚、色服着用、隣保共助等汎く美風良俗を馴致し、農産物の増収、副業の実行など効果亦見るべきものであるが、之と共に既往の農、漁家更生計画の実績は後述の通りであって食糧の充実、負債の償還、現金収支の均衡など民衆生活の安定向上に漸次解決の曙光を見るに至り、彼此相俟って統治の全局に極めて良好の成果を齎しつつある”⁽³⁶⁾。これを一層振作させるために「農村振興歌」(徳田三十四作詞)が朝鮮放送協会で作られた。朝鮮総督府編、『農村更生の指針』2(1936)から引用する。

1		2	
米は万作	お山は緑	白で包んだ	一三道も
梨や林禽の	鈴なる村に	染めた時世の	色服姿
見上げ見下ろす	繭の山	写す鏡は	鋤と鉤
自力更生	腕次第	自力更生	腕次第
稼げ働け	根限り	稼げ働け	根限り
3		4	
砧まかせの	内房後に	虚栄を競うた	昔の習慣
汗の野良へと	晨に急ぎ	消えてあの里	この村人も
縄や吠に	夜も更ける	笑顔鬢の	預金帳
自力更生	腕次第	自力更生	腕次第
稼げ働け	根限り	稼げ働け	根限り

農村振興運動は宇垣総督によって発案(1932)され「朝鮮農地令」「儀礼準則の制定」(1934)などを発表し、1935年からは全部落を対象として実行されたが1936年8月南次郎氏が新しく総督になってから変質しファッション化し1941年終焉まで1930年代を一貫したのである。この運動に対して評価や批判は様々であろう。植民地イデオロギーという大前提にして一方的に否定的な結論しか出せないような研究もないわけではない。それとは異なって価値中立的に実際の目的に沿って農村改革は成果を上げたか否かについての考察は「親日的」であるなどと非難されがちである。

またこの運動は如何に評価しようとしても学問的に評価できない要因もあり、春窮期をなくしたという証拠は一つもないという相反する見解があつて⁽³⁷⁾、1940年代に農村運動として持続せず変質したことは多少の成果さえ消された結果になったのであろうか。戦後農村振興運動を想起することさえなかったのである。

5 セマウル運動の起源

朴正熙大統領は農村振興運動の指導者「中堅人物」を養成した経験を思い浮べたようである。セマウル運動は農村振興運動と構造的に似ている。その体験はセマウル運動として実行させたのではなかろうか。朴正熙は革命直後「再建国民運動」や1960年代後半の第二経済、生活合理化運動の延長線で勤勉、自助、協同の精神による農村開発運動を言及した⁽³⁸⁾。また朴は語録や揮毫に「自立更生」、「農村振興」、「維新」などの言葉を揮毫によく書いた。‘自立更生’‘維新’は日常的にあまり使われていない言葉である。‘更生’という言葉は主に病人や犯罪者などが蘇生や社会復帰することを意味するものであり、それを彼が使ったのは日本語のイメージから来たものと思われる⁽³⁹⁾。

1962年一次経済開発計画以来20年間は急成長を成し遂げた。麦峠という春窮期をなくした。1970年4月22日全国地方長官会議で「農漁村を振作せよ」という趣旨の指示により内務部中心に始まったという。1970年11月第2回農漁村所得増大競進大会でビニールハウス栽培に成功したという河四容(夫婦が下男と女中)氏の成功事例が発表されたのを聞いた朴大統領が称賛激励し⁽⁴⁰⁾、その年11月から1971年6月まで農閑期を利用して全国33,267の里洞にセメント335袋づつ無償で支給し里洞開発委員会を中心に村の環境改善を推進するようにした。これは部落民の自助力をテストしたのである。その結果半分位の村では自ら資金を加えて労働して良い成果を上げたのである。ここに朴大統領は自信を持ってセマウル運動を展開するようになった。村を基礎村、自助村、自立村に区分して自立村を中心に援助して村間の競争をさせた。道路、橋作り、藁葺き屋根の改良、上水道作り、電化事業、セマウル会館建築、稲の品種の改良、農協の活性化、所得増大化などの中央から地方へ上命下達式の運動を展開した。こうして人権蹂躪の問題を含みながら経済は成長し⁽⁴¹⁾、セマウル運動を発案して継続的に実行して韓国の近代化を推進して成功させたといわれる。それは彼が農村出身として経験的に自覚している近代化の哲学であると言われている⁽⁴²⁾。1965年1月6日農業協同組合中央会で「自立更生」を、国民教育憲章として1968年12月5日に宣布した。1972年からはセマウル指導者を訓練するようになった。朴大統領は自らセマウル歌を作詞作曲もした。朴氏は師範学校の時からラッパを吹き、小学校の教師をした時にラッパを演奏したり、楽団も組織したということからも作曲は出来る人である(慶尚北道聞慶郡葛平里居住の権士文氏(68才)談)。

1

夜明けの鐘が鳴り 新しい朝になった
 貴方も私も起きて 新しい村を育てよう
 住み良い我が村 我らの力で作ろう

3

相互協力し合って 汗流して働く
 所得増大して 豊かな村を作ろう
 住み良い我が村 我らの力で作ろう

2

藁葺きの家のなくし 村道も広げ
 緑山を作り 儉しく育てよう
 住み良い我が村 我らの力で作ろう

4

我らみなが力強く 戦いながら働き
 働きながら戦って 新し祖国を作ろう
 住み良い我が村 我らの力で作ろう

(筆者 訳)

1972年1月からセマウル指導者の研修が始まった。金準院長（1971-1984）が直接教授たちに講義をしたり生活も一緒にしたりした。郡単位で一人ずつ全国から集められ140人の研修生が参加するようになった。1973年6月水原にセマウル指導者研修院を設立した。講義、成功事例発表（男性60件、女性20件）、分任討議（72-73主題は住民の参与問題125、所得源の開発79、指導者に関するもの76、事業の選定70、基金助成70、労働力動員27、公務員34）が主であった。1974年から中央公務員局長級の人も一緒に研修を受けるようになった。75年から大学教授も受けるようになった。その他社会指導者、企業人などが受けたのである。このように工場セマウル、都市セマウル運動などが展開されたのである。

セマウル運動の基本精神は近代化と民族主義に要約される。その精神を啓発させるために虚礼虚飾を排撃し合理的な生活態度を持たせる。その延長線で「国民教育憲章」と「家庭儀礼準則」を宣布したのである。一方所得増大のために農道改良、河川整理、小溜め池づくり、共同井戸、藁葺き改良、種子改良、橋と電気架設、営農改善、セマウル婦人会を中心に節米運動（麦ご飯が栄養があり、米のご飯は病気になるという宣伝）、技術習得、村金庫、購販事業、環境改善、協同事業などを推進した。朴大統領は1973年2月26日ソウル大学の卒業式で知識人たちの役割は祖国近代化のために科学と技術を錬磨すると同時に我が特有の伝統的価値観を合理的に体系化して近代の精神的支柱を確立すべきであるといった。朴正熙大統領の近代化政策の思想的温床は農村の近代化つまり農民の前近代的意識構造の官尊民卑思想、職業貴賤観、党争の遺産、事大主義、儒教的形式主義、男尊女卑、依他主義、家族主義、派閥性などの近代化であって儒教的家族指向から民族や国家のために奉仕する人間へ改造することを強調した⁽⁴³⁾。そこで最も重要視されたのが‘国是’（農村是、教育是など理想を意味する）第一の反共主義、近代化、韓国式民主主義でありいずれも現実的に要求されるのは祖国近代化と民族主義であった⁽⁴⁴⁾。

セマウル運動、維新憲法などで政府は総和団結のために民族主義を高潮するようになった。それは戦前の日本がモデルであったと思われる。もちろんそれは全くの複写版ではなかった。近代化の合理主義と非合理的なものの調和のある政策でもあった。あるいは軍事政権の軍隊式の政策

もあったのであろう。その代表的なものが「家庭儀礼準則」の制定、「国民教育憲章」、「国旗敬礼」などである。1968年に新生活運動の一貫として提出したが反発があって撤回し、1969年「家庭儀礼準則に関する法律」が1973年3月国会のない「非常事態」のなかで国务会議の議決で「家庭儀礼に関する法律及び施行令」「家庭儀礼準則」が成立したのである。前者は違反者への処罰があり後者は主に啓蒙や奨励の趣旨が強い。「国民教育憲章」は1968年12月5日に宣布された。初案作成委員は朴鐘鴻、李寅基、柳炯鎮である。公式の行事には朗読するようになった⁽⁴⁵⁾。

「国旗敬礼」毎日の国旗掲揚式と下旗式の時、映画上映の前などには愛国歌とともに敬礼するようになった。それに伴って後に伝統文化の文化創造の源泉であるという文化政策が取られたのである。文化芸術振興法の制定、民族文化センターの設立、地方文化事業造成の制定、学・芸術院の運営強化、国立博物館の重建、国立劇場の新築、世宗文化会館の建築、国会議事堂の新築、国立図書館の拡充、マウル文庫事業の支援、精神文化研究院の設立、文芸振興院の設置、国際文化交流のための関係法律の制定、文化財の発掘・補修・復元・浄化・保存管理などに国力を注いだのである。韓国政府は近代化と共に伝統文化への関心も高めていった。1968年からは韓国文化人類学会に依頼して全国民俗総合調査を始めた。後には韓国精神文化研究院が設立されて口承文芸の全国的な調査を行なったのである。

6 セマウル運動と農村振興運動の比較

1. 宇垣一成と朴正熙

二人とも農村出身として陸軍大将の軍を背景にして権力を握った人である。宇垣は岡山県の農村出身であり、朴は慶尚北道の貧農の出身である。その農民に誇り持たせながら農村を改革していこうとした。宇垣は「自立、勤儉、協同共栄」を叫び、朴は「自助・自立・協同」を叫んだ。

2. 戦前の1930年代から戦後1960-70年代の時代性は極めて異なっている。しかし朴正熙にとっては20代の体験として生き残っていたのであろう。宇垣が総督に着任した時彼は朝鮮の経済恐慌と民族解放闘争の激化という、植民地支配最大の危機に直面した支配者たちが、自己の努力をファッション化させることによって、その危機に政治生命を賭けたのが農村振興運動といえればそれとは対照的に正当性を持たない軍事政権として政権延長のために政治生命を賭けたのがセマウル運動といえる。国民総和のために宇垣は「教育勅語」と「儀礼準則」を強調したし、朴は「国民教育憲章」と「家庭儀礼準則」を制定した。つまり経済的発展の不均衡から軌道修正するためにも物質だけではなく精神的な開発を強調するようになりセマウル運動を精神革命とも言った。このような物心両面の政策は農村振興運動の「物心一如」と同様である。

3. 朴正熙の独創的な政策といわれるセマウル運動は別にガイドラインがなく、自分で体験した農村振興運動のものであったのであろう。その証明としては両方とも自力更生・自立更生を強調するがそこに有名無実である李朝時代の「郷約」運動を参考にしている点で共通していることであ

る。また朴は「育林地」を制定していることである。戦後4月5日を植木日として公休日にして
いるのにもかかわらず「育林地」を制定したのは農村振興運動の中の愛林地に対応させたように
思われる。その他「5個年計画」や「セマウル歌」（1-4節）も農村振興運動に対応させたよ
うである。日本の国旗掲揚と忠君愛国は韓国の国旗掲揚と忠孝愛国へ切り替えたと思われる。

おおむね忠孝愛国，国民教育憲章，国旗掲揚などの中身が日本の代わりに韓国であることであ
り，全体構造や基本精神は大部対応している。これはセマウル運動が少なくとも農村振興運動を
参考にしたという蓋然性が高いことを意味するのである。それは朴大統領の体験だけではなく，
セマウル運動の実行メンバーたちは農村振興運動をモデルにしたのかも知れない。主要な点を対
照させて見ると次の表のようである。

	セマウル運動（1970年代）	農村振興運動（1930年代）
理念	自助・自立・協同，忠孝愛国 国民教育憲章	自立，勤儉，協同共栄，忠君愛国 教育勅語
標語	自立更生（郷約）	自力更生（郷約）
主体 組織	セマウル研修院 選拔式 地方長官会議→内務部→内務部長・産 業部長→道・郡島・邑面一部落	農道講習所 選拔式総督→道知事会議→道・郡・面 ・洞里国旗掲揚，不言実行，禁酒，文
主な内容	国旗掲揚，不言実行，社会浄化迷信打破， 清潔整頓（掃除，沐浴）家庭儀礼簡素 化「家庭儀礼準則」，便所改良，台所改 良 模範部落 経済開発5個年計画 育林地 セマウル歌（1-4）	盲啓蒙諺文（朝鮮語），色服奨励，節約， 優越感，活動写真利用，迷信打破，家 庭儀礼簡素化「儀礼準則」，火口改良， 炊事場改良 模範部落 農家経済5年計画（平安道） 愛林地 農村振興歌（1-4）

以上いろいろ似ている点が多いがセマウル運動は農村振興運動の複写版ではない。それをモデ
ルにした，独裁者による政策にしても自民族であることは植民地政策の農村振興運動とは根本的
に異なっている。朴正熙は韓国的民族主義を提唱しながら豊かな国作りの夢を国民に与えた。テ
レビなどマス・メディアを最大に利用して進めた。それは1979年朴大統領の暗殺以後軍事政権に
も続いて1995年ソウル市庁のセマウル旗を下ろすまでほぼ30年間続いたのである。その意味では
農村振興運動とは比較にならないほど成功したといえる。

7 結論

戦後初代大統領の李承晩独裁政権が長期化して国民の不満が高まり主に学生デモによりその政権が倒れ国家が弱くなった時朴正熙が軍事クーデターを起し権力を握ったのである。せっかくの民主化の夢は外れてしまい、国民の失望は大きかった。しかし朴は不正剔抉（てっけつ）して速やかに民政権への移譲を約束した。しかし彼は自ら民政権者に変装し政権の長期化を図るためにセマウル運動を強力に全国レベルで実施した。勿論多くの知識人から批判されたがそれにも敵対視し、弾圧政策を取りながら一貫して推進した。私自身もセマウル運動の展示的政策であり伝統文化の破壊などと思い、非常に否定的であった。特に人権問題などは韓国民主化を逆転させているので不満は高かった。しかし私は最近そのセマウル運動が肯定的な評価を受けていることに気が付き、矛盾を感じた。例えば John E. Turner などは再建国民運動などの啓蒙運動、儒教思想、経済開発計画、ナショナリズムなどを総合的に考察した上で、朴正熙大統領の中央政府主導のセマウル運動に注目し八つの村を二時点（1979と1984）で調査・研究し、セマウル運動を中心とした経済発展したという評価をした⁽⁴⁶⁾。そこでセマウル運動を見直してみたいと思い、考察した。

まずセマウル運動のモデルが不明であり、それには戦前の日本帝国主義的な要素が濃いのが気になり、それを証明しようとした。朴大統領が20代に農村振興運動の指定学校に勤務したことが分かり、それを基礎におき、調べることにした。

戦後韓国には4H運動や再建運動など大小の農村の改革運動が行なわれたが国家レベルで全国的に持続的に行なわれたものは朴大統領によるセマウル運動である。それは朴大統領自身が経験した日本時代の農村振興運動がモデルになったものである。またそれは朝鮮総督府が日本本国で行なった運動が大きく参考になったのである。つまり宇垣一成総督が愛知県において全村学校などの農民振興運動を成功させた山崎延吉氏を誘い、朝鮮総督府の囑託にし、彼の協力により全朝鮮に農村振興運動を起したのである。その運動はさらに明治時代まで遡るので歴史的な教訓を参考にしたものと言える。結論的に言うと朴大統領が若い時体験した農村振興運動をモデルにしたセマウル運動は日本植民地時代の農村振興運動に根源があり、つまりそこからアイデアを得たといえる。しかし彼は信念を持ち力を尽くして持続させたのである。従って農村振興運動と同じものではない。これによって彼の政策が親日的であるなどと評価を下げられることは決してない。このように日本植民地時代の経験は肯定的に昇華できるという模範を朴大統領が見せたことにもなろう。戦後日本植民地時代の遺産はただ持続するだけではなく、恨みをも活力としている韓国人の可能性が見えているのではなかろうか。

註

- (1) 崔吉城, 1994参照。
- (2) 文玉杓, 1990:21-24

- (3) イサンウ, 1993 : 117-118, 朴正熙の軍歴については広島大学の小池聖一氏が協力してくれた。
- (4) イサンウ, 1993 : 16-20
- (5) 鄭在景, 1991 : 47
- (6) イサンウ, 1993 : 23
- (7) イサンウ : 120 ; 1963, 向文社 : 鄭 : 50
- (8) 鄭在景, 1991 : 577-579
- (9) 崔朱喆, 1976 : 59-68。
- (10) 李素玲, 1984 : 63
- (11) 桜井浩 1975 : 35 ; 韓国精神文化院, 1989 : 619
- (12) 谷浦孝雄, 1980 : 21
- (13) Pak Ki-hyuk & Sidney D. Gamble, 1975 : 195-201
- (14) 李素玲, 1984 : 63
- (15) Turner : 73
- (16) 韓, 1986 : 233-277
- (17) 宮田節子, 1965 : 29。
- (18) 八尋生男, 1983 : 42。
- (19) 富田晶子, 1981 : 96
- (20) 青野正明, 1991 : 50
- (21) 山崎延吉先生還暦祝賀刊行会, 1932 : 860-861
- (22) 朝鮮総督府, 1936 : 1。
- (23) 朝鮮総督府, 1933 : 151
- (24) 朝鮮総督府の『農山漁村に於ける中堅人物養成施設の概要』(昭和11年12月)の著言では“この機関は朝鮮更生を目ざしたる農村振興運動の原動力である”と言って全国40ヵ所の訓練所を紹介した。op. cit : 225
- (25) 聞慶調査において叔士文, 林昌發, 錢道安諸氏の協力を得た。
- (26) 八尋生男, 1983 : 14-15
- (27) 富田晶子, 1981 : 82
- (28) 宇垣一成日記, 1970 : 948
- (29) 宇垣一成日記, 1970 : 988
- (30) 山崎延吉伝刊行委員会, 1966 : 137, 182-185
- (31) 韓基彦・李啓鶴, 1993 : 132
- (32) 「農村振興」 : 17
- (33) 今井清一他編, 1963 : 503
- (34) 1995, 11, 73河安城市文化センターにある山崎延吉氏の資料館及び文庫見学調査, 同センターによると朝鮮での講演会が411回という。同市の博物館の協力を感謝したい。愛知県立安城農林高等学校同窓会, 『生誕100年山崎延吉の生涯』, 岡田印刷所, 1984。
- (35) 農村振興 : 47-8
- (36) 朝鮮総督府, 1940 : 8
- (37) 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波新書, 1971 : 161-7
- (38) 『韓国民族文化大百科事典』11 : 619 ; 朴振煥 : 241 ; 鄭 : 453
- (39) 崔鉉培, 『国語更生の道』はある
- (40) 朴振煥, 1994 : 207-211
- (41) 全国平均農家所得 (1970-1981)
- | | | | |
|------|-------|------|-------------------|
| 1970 | 824\$ | 1976 | 2,239 |
| 1971 | 1,025 | 1977 | 2,961 |
| 1972 | 1,075 | 1978 | 3,893 |
| 1973 | 1,209 | 1979 | 4,601 |
| 1974 | 1,393 | 1980 | 3,972 |
| 1975 | 1,804 | 1981 | 4,579 (朴振煥 : 226) |
- (42) Sung Hwan Ban, *Saemaui Undong*, Korea Development Institute, 1977 : 12
- (43) 鄭在景, 1991 : 297
- (44) 鄭在景, 1991 : 77 ; 金星鎮編, 1994 : 231
- (45) 「われわれは民族中興の歴史的使命をもってこの土に生まれた。祖先の光る魂と今日に活かせ内側には自主独立の姿勢を確立し, 外側には人類共栄に誠を尽くすべきである。ここに教育の指標を示す。誠実な心と健康な体で学問と技術を習い生まれ付きの素質を啓発し, 現在の状況を足場にして創造の力と開拓の精神を育てる。公益と秩序を優先し, 能率と実質を尊敬し, 敬愛と信義に根を降ろした相互扶助の伝統引き継いで明るく温かい協同精神を涵養する。われわれの創意と協力によって国が発展し, 国の隆盛が私の発展の根本であることを認識し, 自由と権利にともなう責任と義務を果し, 自ら国家建設に参加し奉仕する国民精神を高める。反共民主精神に透徹な愛国愛族はわれわれの生きる道であり自由世界の理想を実現する基盤である。末長く後孫に譲り上げる栄光な祖国統一の未来を眺めながら信念と矜持を持つ勤勉な国民として民族の知恵

を集め変らぬ努力によって新しい歴史を創造しよう。」(1968, 12, 5, 筆者訳)
(46)John E. Turner/Vicki L. Hesli/Dong Suh Bark/Hoon Yu, 1993:11

文献

- 『優良部落』, 朝鮮総督府内務局社会課, 1928。
山崎延吉・稲垣稔, 『農村の新教育:全村学校』, 泰文館書店, 1929。
山崎延吉先生還暦祝賀刊行会, 『興村行脚』, 1932。
朝鮮総督府, 『朝鮮の墾拓』1933。
朝鮮総督府, 『農山漁村に於ける中堅人物養成施設の概要』, 1936a。
朝鮮総督府, 『農村振興運動の全貌』1936b。
朝鮮総督府, 『朝鮮に於ける農山漁村振興運動』1940。
今井清一他編, 『皇道維新の雄叫び』『現代史資料:国家主義運動』, 1963。
宮田節子「1930年代日帝下朝鮮における農村振興運動の展開」『歴史学研究』297, 青木書店, 1965。
山崎延吉伝刊行委員会, 『山崎延吉伝』, 1966。
『宇垣一成日記』, みすず書房, 1970。
山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波新書, 1971。
桜井浩「セマウル運動と韓国の農村」『アジア経済』XVI-2, 1975。
内務部, 『セマウル運動』1975, 1979, 1983。
Pak Ki-hyuk & Sidney D. Gamble, *The Changing Korean Village*, Shin-hung Press Seoul Korea, 1975
崔朱喆, 『セマウル運動の理論と哲学』大韓公論社, 1976。
Sung Hwan Ban *Saemaul Undong*, Korea Development Institute, 1977
朴正熙, 『セマウル運動』, 1979 (演説集)。
谷浦孝雄「韓国における農村政策の展開」『アジア経済』XXI-10, 1980。
内務部, 『セマウル運動10年史』, 1980。
Saemaul Undong, Institute of Saemaul Studies, Republic of Korea, 1981。
富田晶子「準戦時下朝鮮の農村振興運動」『歴史評論』377, 1981。
ソウル大学・セマウル総合研究所, 『セマウル運動の理念と実際』, 1981。
セマウル指導者研修院, 『セマウル指導者研修院10年史』, 1982。
八尋生男「朝鮮における農村振興運動を語る」『朝鮮における農村振興運動』友邦協会, 1983。
セマウル運動中央本部地域開発調査研究団, 『セマウル運動理論体系定立』, 1984。
李素玲, 「韓国の農村開発」『アジア経済』XXV-8, 1984。
韓下鉉「1930年代農村振興運動の性格」『韓国近代農村社会と日本帝国主義』, 文学と知性社, 1986。
朴振煥, 『経済発展と農村経済』博英社, 1987。
韓国精神文化研究院, 『韓国民族文化大百科事典』11, 1989。
文玉杓, 「日帝の植民地文化政策」『日帝の植民地支配と生活相』, 韓国精神文化研究院, 1990。
青野正明「植民地期朝鮮における農村再編成政策の位置付け:農村振興運動期を中心に」『朝鮮学報』136, 1990。
青野正明「朝鮮農村の中堅人物」『朝鮮学報』141, 1991。
山崎延吉, 『農村教育論』, 日本図書センター(復刻版), 1991。
鄭在景, 『朴正熙思想序説』, 集文堂, 1991。
イサンウ, 『朴正熙破滅の政治工作』東亜日報社, 1993。
John E. Turner/Vicki L. Hesli/Dong Suh Bark/Hoon Yu, *Villages Astir: Community Development, Tradition, and Change in Korea*, Praeger Publishers, 1993
韓基彦・李啓鶴, 『日帝教科書に関する研究』, 韓国精神文化研究院, 1993。
朴振煥, 「セマウル運動」『朴正熙時代』(金星鎮編), 朝鮮日報社, 1994。
崔吉城「日本植民地の持続と変化」『郭永喆博士還暦記念論文集』1994。
金星鎮編, 『朴正熙時代』, 朝鮮日報社, 1995。
李度晟, 『実録朴正熙と韓日会談』, 図書出版寒松, 1995。
※本稿は1995年11月11日国立民族学博物館共同研究会の「韓国社会:高度経済成長化のフィールドワーク」(代表 嶋陸奥彦)と1996年3月6日サントリー財団の「アジアと近代研究会・植民地文化と現代」(代表 青木保)において口頭発表し討議しコメントを頂いたものに基づいて作成したものである。
(広島大学総合科学部, 国立歴史民俗博物館客員教官)



写真1 開慶初等学校

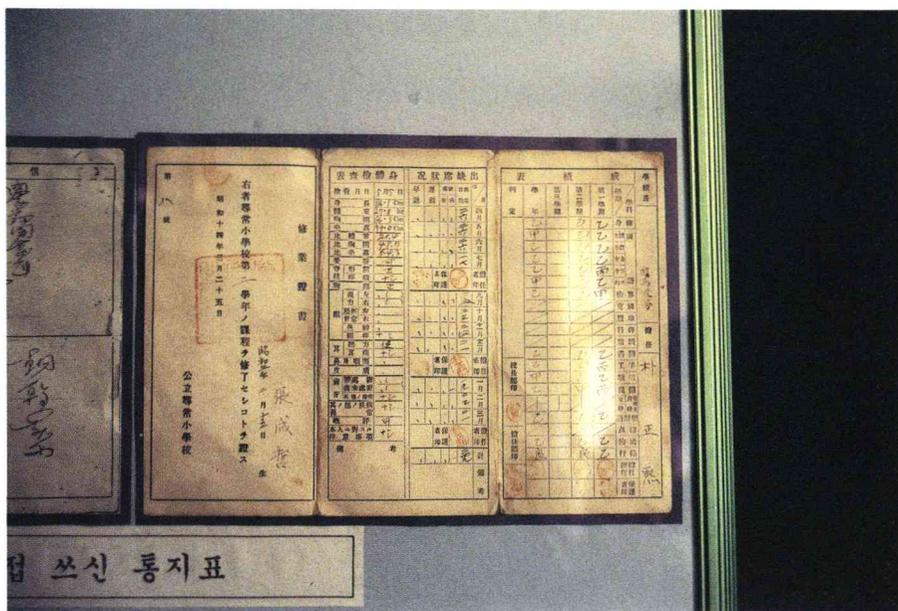


写真2 林正熙担任成績票



写真3 教職員写真（正面中央・有馬校長，後列右端・林正熙）

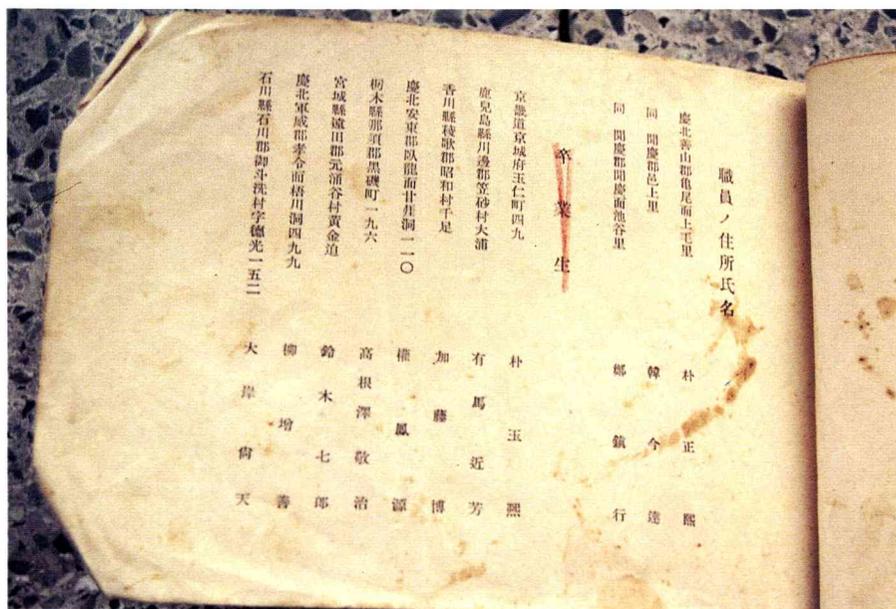


写真4 職員名簿

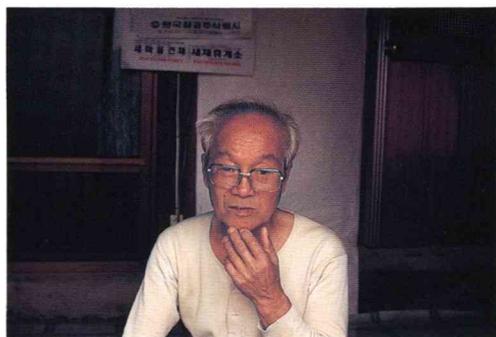


写真5 金成煥氏 (82才)



写真6 朴正熙下宿



写真7 インフォーマントたち
左から权士文氏, 李慶祿氏, 右端は筆者



写真8 葛平初等学校 (前面)

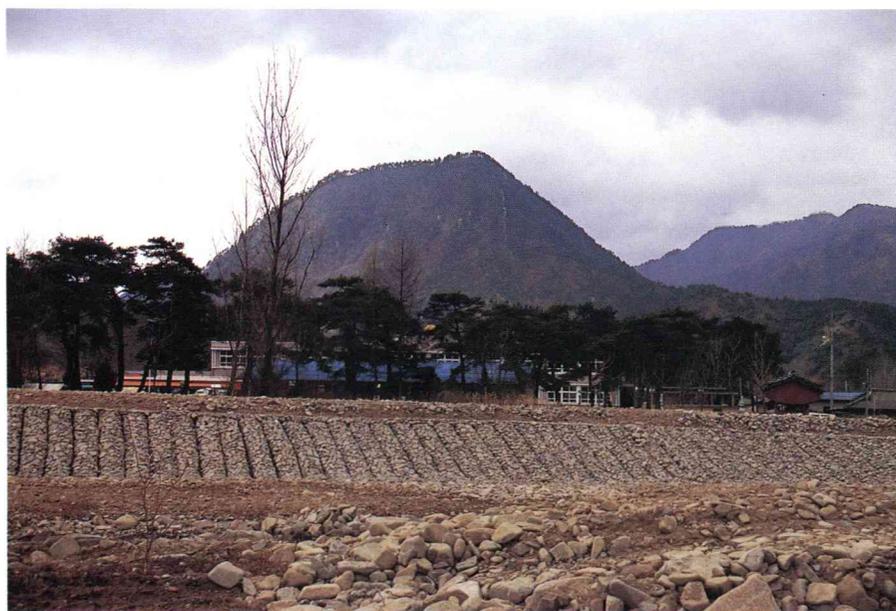


写真9 葛平初等学校 (後面)

The *Saemaul* Movement and the Campaign for the Advancement of Farming Villages

CHOI Kil-sung

Post-war Korea's progress is said to have resulted from President Park Ch'ung-hee's economic plan, and also from the *Saemaul* movement. In particular the latter movement - hailed as a spiritual revolution among agricultural communities - is said to have succeeded thanks to the efforts of President Park, who was an enthusiastic supporter. He himself had come from an agricultural village, and had urged the modernization of such communities. He had built a political base among farmers, and had promulgated a forward-looking peace-time constitution, so his interest in the *Saemaul* movement was more than merely perfunctory. To attain an understanding of President Park's policy and South Korea's post-war economic development it is essential, I believe, to study the *Saemaul* movement. Its nature and origins are still obscure. It has been compared, perhaps superficially, to North Korea's Ch'onrimsa movement, and to the revolution carried out by Kemal Pasha in Turkey, but thus far it has received little analysis. As one who lived through this period, it seems to me that the *Saemaul* movement resembled pre-war Japan's Movement to Develop Agricultural Villages. I have been gathering materials for an empirical study of the *Saemaul* movement, spurred on by recent claims that it shares similarities with the Movement to Encourage Agricultural Villages which was launched in Korea under Japanese colonial rule. While doing so I discovered that the primary school in which President Park had taught for three years as a young man was one which had been designated as a unit in the Movement to Encourage Agricultural Villages. On paying a visit to the area in which this school was located I was informed by elderly people that Park had led the school's participation in the movement. I also visited the Yamazaki Archives in Anjou City to learn more about Yamazaki Nobuyoshi, whom Ugaki Kazushige, then Governor-General of Korea, had placed in charge of the Movement to Encourage Agricultural Villages. In this paper, ignoring any hostility to Japan because of the history colonial occupation, I demonstrate through a combination of objective research and field work that President Park's *Saemaul* movement was modelled on the Movement to Encourage Agricultural Villages promoted by Japan in colonial Korea.